

いわれるカニクイザル精子の先体反応に要する時間（先体反応時間）に、時期による差が認められた。一方、ニホンザルの精液性状では、個体差が大きく、年齢および季節による著しい差異は認められなかった。しかし、精子の卵侵入率は、3頭とも8、10月に比べ12月に著しく高値を示したことから、ニホンザル射出精子の先体反応時間に、交尾期にほぼ合致した短縮、つまり、季節的な変化があることがわかった。

自由41

五木村と相良村におけるサルの伝承や禁忌の比較研究

藤井 尚教（尚絅大・心理）

相良村誌の編纂過程で、1992年にはサルと村人との係わりを調べる目的をもって、サルに関する伝承や禁忌についての面接調査を行い、201名の資料が得られた。

この結果と比較するために1993年に五木村の南部地区を中心に同様の面接調査を行った。

「サル」は山言葉として禁忌され、「山のおんちゃん」、「山んと」、「山のおによ」あるいは「エンコウ」が使われ、両村間で差はない。

サル殺しの禁忌は相良村では子や孫にたたとして非常に強くしかも隠された形で存在していたが、五木村では西日本に存在する一般的なものであった。禁忌に反してたたられたとされる例が現存する相良村では禁忌が部分強化されているといえる。

サル肉を食べると薬になるとかうまいとかの話は両村で得られたが、サル殺しの禁忌がある地域にサル肉食があることは大きな矛盾である。

サルの黒焼きについては相良村ではその製法やその売買についての話が残っているし、それに従事した人もいるのに、五木村では知らない人が多く、噂だけだといわれる。

最大の関心事であったサルの手については、相良村では安産、招福、魔除、捜し物に使われ、右手よりも左手がその効能は大きいといわれていて、大切に収納されていたり、玄関に飾られていた。

一方、五木村では発見した唯一の例では馬小屋の表の柱にサルの両手が打ちつけてあり、いわゆる魔猿として使われていた。ところがその馬小屋は馬も牛もいず物置と化して、崩れかけていた。

馬や牛の繁殖を願う魔猿は、相良村ではすべてサルの頭蓋骨であったが、五木村ではサルの手が使われていて、他にもいく例があったようである。

隣村でありながらこのような差異はどこから生じているのか、五木村での今後の調査に待つところが大きい。サルそして禁忌と二重に危ないものを扱ったために五木村では警戒された感もあった。今後の調査方法を再考したい。

また、農林業の衰退や過疎やダム建設による離村で民俗的事が消えかけている現在、一刻も早い資料収集が求められている。

自由：42

霊長類の聴覚系、前庭系における神経伝達物質および受容体に関する研究

宇佐美真一、松原 篤

（弘前大学・耳鼻咽喉科）

アカゲザルの末梢前庭器における substance-P (SP)、calcitonin gene-related peptide (CGRP)、 γ -aminobutyric acid (GABA) の分布について免疫組織化学的に検討した。

SPは、末梢前庭器（半規管膨大部および耳石器平衡斑）の辺縁部において、前庭求心系と考えられる部位にその陽性反応が認められた。CGRPおよびGABAは、末梢前庭器の前庭遠心系と考えられる部位に陽性反応が認められた。この結果を、我々が以前リスザルで行った検討と比較すると、SPとGABAの分布については差異は認められなかった。これに対してCGRPについては、リスザルでは前庭遠心系に陽性反応が認められなかったのに比し、アカゲザルでは前庭遠心系にCGRP陽性反応が認められ、霊長類の前庭遠心系において、神経伝達物質の分布に種差が存在することが明らかとなった。

自由：43

染色体バンド特異的DNAプローブを用いた蛍光 *in situ* hybridization 法による霊長類の核型進化モデルの検討

数藤由美子、平井百樹

（東京大学大学院・理学系研究科）

高等霊長類における核型進化を、新たな分子細胞遺伝学的方法を用いて調べることを目的とした。